近世東濃周辺の作事に従事した知多大工

山口　　潤
（妻木城址の会）

1．はじめに

近世における大工の作事活動を研究する上で、社寺の棟札は最も豊富で有力な情報源である。東濃地方周辺における棟札の調査は、これまで各市町村史の編纂過程において行われたものが多かったが、一部が公表されている程度の断片的な情報だったため、総合的な傾向をつかむことが難しかった。しかし、2010年3月に可児市史編纂室により悉皆調査に基づいた資料集が刊行され(1)、また、土岐市妻木町周辺においても、妻木城址の会が長年にわたって精力的に調査・整理を行い、データベース化が進められており、まとまった数量での比較検討が可能となりつつある。

このように、近世東濃地方における各村々の社寺造営の担い手たちが通時代的に明らかとなる中で、特に目を引くのは、遠来の知多出身大工が散見されることである。これらは個々に見れば1か所の神社で1、2回程度の関与なので、従来関心を持たれることがなかったが、広域的に見た場合、尋常ではない件数となり、この地域の作事において一大勢力であったことが浮かび上がる。本稿は、棟札や文献史料をもとに、知多大工の関与した作事の事例を挙げ、その活動の実態と背景を考察するものである。

2．知多の風土と『尾張徇行記』等に見られる大工の出稼ぎ

知多半島は平野が乏しく灌漑が難しい地形のため、農耕適地が少なかった。それに比して人口は近世を通じて増加したため、様々な出稼ぎ手段が発達し、尾張藩も他国稼ぎを容認していたという(2)。そのうち土木に従事した黒鍬稼ぎ、主に消費地に出向して農具を鍛造した大野鍛冶などが特に有名で、文献史料、明治年間に従事した古老の証言、民俗資料などから、詳細な研究が進められている(3)。

一方、大工も出稼ぎ手段の一つとして、江戸時代後期の知多の風土を記した『尾張徇行記』には、いくつかの村において記述が見られる。特に切山（きりやま）村は「大工二十四、五人ありて三州・濃州あたりまでも傭われ行き産業とす」(4) とあり、三河から美濃にかけての地方を主要な行き先としていたことがわかる。その切山村は、文政3年（1820）時点で、村民16～60歳の男子人口82人のうち、36人が大工職として出稼ぎをおこなっていたとされ、村の経済を支える主要な生業であった(5)。

このように出稼ぎにより大工を送り出す動機は明らかだが、行き先や作事例など具体的な部分は、これまでほとんど把握されてこなかった(6)。一方、受け入れ側である美濃においては、近世の大工に関する研究がほとんどおこなわれてこなかったため、遠く知多からの大工が棟札に名を連ねる理由については、従来触れられてこなかった(7)。そのために送り出す側と受け入れ側の情報の接点がこれまではほとんどなかったのである。

3．棟札・文書に見られる知多大工が従事した作事

143～145頁資料1・2は、東濃地方周辺の棟札や文書にみられる知多の大工を一覧にしてまとめたものである。明治時代の6件を含めて、現時点で70件以上の作事への関与が確認できた。地元や近隣を除けば、名古屋や畿内系の大工も散見されるものの、知多の大工の件数は圧倒的に多い。妻木八幡神社文書では、知多大工が穀物蔵や土蔵を手がけた記録もあるので、社寺だけではなく、民家等の作事も手がけていた可能性を示しているが、こうした建物は現存しない上、記録としても残っていないか、公表されるのが稀であるため、実態を把握することは社寺よりもはるかに難

しい。

東濃周辺において知多大工の関与した作事の最も古い事例は、今のところ享保13年（1728）の土岐市鶴里町若宮神社社殿等の葺替である。東濃地方全体として見れば、江戸時代中期から明治初頭まで、知多大工がほぼ継続的に作事のため来訪していたことがうかがえる。

作事全体に占める比率で見ると、悉皆調査が行われている可児市においては、現代まで含めた全体では1236点中13件の1.1％、近世だけに限っても2％未満だが、妻木町においては棟札だけでも全341点中23点の約6.7％、近世だけに限れば約12％という比率で、可児市に比べかなり高い割合を示す。多治見市内での調査状況は断片的だが、すでに20件以上確認されており、多くの神社でそれぞれ1度か2度は知多の大工の名前が見られる傾向にあることから、妻木町の状況に近いと思われる。また、尾張・三河地方での情報は少ないものの、長久手町では数例が確認でき[8]、日進町では36件中10件に関与が見られる[9]ことから、可児市よりも作事数は多くなりそうである。こうした傾向から、知多大工の出稼ぎ先としては、可児市は比較的希薄な縁辺部にあたり、その中心はもっと南の多治見市から瀬戸・長久手や三河方面に伸びていく可能性が高いと推定する。今後瀬戸市や豊田市などの状況にも注目したい。

知多郡内の出身村別に見ると、表1のとおり知多半島内でも特に切山・片名などの南部の諸村が多数を占めるが、岸幕家を始めとした宮大工が集住していた阿久比横松村出身者の名は、近世では見られない。『尾張徇行記』に大工稼ぎの記述のある切山・古布（こう）・矢梨（やなし）・布土（ふっと）の各村に関しては、いずれもその出身者の名が見られ、中でも行き先が濃州・三州と明記されている切山村は、その記載内容と符合して突出して多く、約4割を占める。一方、同書に記載のない片名村出身者は、東濃地方では幕末から明治初頭にかけて他村より遅れて従事する傾向がみられる。同村の大工は、豊橋市清須町神明社において寛文3年（1663）および寛政5年（1793）の遷宮造営時に従事している[10]ので、元々近場の三河方面には早くから出稼ぎを行っていたものと思われる。東濃方面へは、行き先を変更もしくは拡大したのではないか。

上記のように、一部は『尾張徇行記』に記載にない村の従事もあるものの、概ね記載内容を裏付ける状況と言えよう。

異なる知多の村出身者が共同して従事している事例は、現時点ではわずかであり、基本的には各村内の大工で請け負っている。また、一部は東濃の地元大工が棟梁を務め、その配下の小工の扱いとなっているが、大多数は単独もしくは同じ知多の大工との連名で棟札に記されている。

個々の大工の動向を見ると、切山村の久保忠八郎重国は、土岐郡久尻村土合郷・同妻木村で従事が確認されており、同じく切山村の久保忠兵衛は、土合郷・妻木村・恵那郡水上村において作事を行っている。両大工は土合郷と妻木村で活動していることが共通しており、血縁者の可能性も考えられる。久保忠兵衛の場合、現在の行政区画上の多治見市・土岐市・瑞浪市の範囲で仕事をしていることになり、かなり広域にわたっていることがわかる。一方で、妻木町の作事にみられる大工は、可

村名	件数	比率
切山	37	44.0%
布土	16	19.0%
片名	15	17.8%
乙方	3	3.6%
古布	2	2.4%
須佐	2	2.4%
矢梨	1	1.2%
矢田/奥田	1	1.2%
坂井	1	1.2%
小倉	1	1.2%
阿久比	1	1.2%
不記	4	4.8%
合計	84	100%

表1：東濃地方の作事に従事した知多の大工出身村の内訳

児市・日進町・長久手町では共通した名前はなく、ある程度営業圏のようなものが異なっていた可能性も想定される。それぞれの営業圏の問題については、棟札調査が依然断片的であるため、実態の把握は現時点では難しいが、このように一部はかなり広域にわたっており、今後広域的な情報の蓄積により、次第に明らかとなることを期待したい。

作事内容としては、社殿の建立・再建以外に、葺替・修築も行っている。総じて葺替等の部分修理よりも、再建などの大がかりな作事への従事が多い。変わったものでは、明和４年（1767）に可児市広見星宮鳥居建立棟札で切山村の久保半助好造は「鳥居大工」と記されており、鳥居の建立を得意とした職人であったのかもしれない。切山村の大工は、これ以外に可児市内において２件の鳥居建立に携わっており、他地域と比べてやや特殊な傾向を示している。

４．地元大工との関係　―土岐郡妻木村における事例―

ここでは、ほぼ悉皆調査が行われて、１村の通時代的な傾向を見ることが可能であることから、土岐郡妻木村（現土岐市妻木町）を例に挙げ、知多大工と地元妻木大工との関係を考察する。

妻木村は、江戸時代当初は土岐郡８ヶ村（7500石）を支配した交代寄合旗本・妻木氏本家の中心であった。しかし、万治元年（1658）に本家が断絶となって、分家が移封・加増により改めて与えられた上郷妻木（500石）・下郷妻木（800石）以外の村は、幕末まで天領となった。

地理的には、南西に隣接する笠原村から峠を越えれば尾州半田川村に通じ、北側は盆地の平野部続きで下石村を経て下街道の高山宿・土岐口宿に至り、名古屋・信州方面へ通じる。南は隣の柿野村を経て三州方面や中馬街道に通じている。

文献資料から妻木村は、大工以外の分野においても知多地方とは縁が深かったことがうかがえる。第一に農鍛冶は知多からの出鍛冶に依存していた。寛政年間の時点では、妻木村は知多郡大野村と西ノ口村の４名の鍛冶親方による入会得意場であったが、陰細工（鍛冶株を持たない職人の不法就労）をめぐって知多で訴訟が起きている[11]。第二に田普請[12]や石段構築といった土木作業においては、何度も黒鍬の職人を招いていた[13]。妻木八幡神社境内には、阿久比谷卯之山村の竹内友右衛門が元治２年（1865）に寄贈した百詣石がある（149頁写真５・６）。当地へ黒鍬職人として何らかの普請のため来訪した際に残したものと推定する。

その妻木村においては、これまでに中世から現代まで341点の棟札が集成されている。これらのうち近世のものが182点あり（146頁資料３）、その中で知多の大工が従事している作事が16件（文書を含めると21件）ある。江戸時代中期における作事内容としては、規模的には小社ながら、知多の大工は葺替などの部分修繕への関与よりも建物全体に及ぶ再建のような作事への従事が多く、この時期の村内社殿再建の半数に関わっている（146頁資料４）。これらのうち４件は地元妻木等の大工との連名となっているが、ほとんどは単独もしくは知多の小工との連名になっている。

知多の出身村別の推移を見ると、妻木村内において享保年間に最初に従事するのは布土村である。その後も同村は江戸時代中期のうちは断続的にみられるが、寛延年間頃からは切山村が主体となる。さらに江戸時代後期に入ると、いずれの知多の村も一旦従事が途絶え、一時空白期間の後、幕末頃から明治初頭にかけて今度は片名村が急増する。これらの傾向は、特定の人物や一族に限らず、村単位で連続して従事するように見受けられる。

次に、妻木村の近世中期から幕末までの棟札を、20～30年程度の年代別に区分し、地元大工の姓から見た家数と、知多大工の従事した作事件数の推移を示したのが次頁表２の一覧である。同姓でも実際には複数で数えるべき家もあるであろうから、実際にはこれよりも若干多くなる可能性はあるが、傾向を見る上では許容範囲の誤差と思われる。

このデータから、妻木村の地元大工は、江戸時代中期時点で２、３家であったのに対し、18世紀末頃から急増する傾向が看取できる。特に最多

年代	西暦	妻木大工	知多大工
享保～元文年間	1716～1740	今井、黒田、水野(計3家)	計4件
寛保～明和年間	1741～1771	東山寺宝教院、堀田（計2家）	計6件
安永～寛政年間	1772～1800	大野、小木曽、加藤、鈴木、長江、細尾、堀田（計7家）	計4件
享和～文政年間	1801～1829	大野、石川、小木曽、加藤、坂田、林（計6家）	計0件
天保～弘化年間	1830～1847	大野、石川、小木曽、加藤、黒田、鈴木、長江、曽根、林、水野（計10家）	計0件
嘉永～慶応年間	1848～1867	黒田、倉内、鈴木、仙石、曽根、水野（計6家）	計2件

表２：江戸時代中期～幕末期の妻木村作事に見られる妻木大工と知多大工

となったのは天保・弘化年間で、区切りとしては短期間ながら、10家を数える。この期間は、妻木村内において作事が多く行われた時期にも重なっている。

それに対し、知多大工は先述のように江戸時代中期では比較的多く従事しているものの、江戸時代後期に入るとほとんどなくなるので、地元大工の家数との関係はちょうど反比例するような形となる。江戸時代後期では、名古屋や近隣の大工も一部は見受けられるが、件数としては目立った数ではなく、これらの勢力が知多の大工を駆逐したとは考えにくいので、地元の大工の増加が知多大工への依存度を減少させたと考えられる。

ただし、妻木村内での作事件数は江戸時代後期から幕末にかけては増加しているので、大工の需要自体はむしろ拡大していたはずで、知多大工の一時途絶の背景は単なる人員的な面だけでなく、地元大工の技術的な成熟など外部への依存が減少する別の要因も絡んでいる可能性がある。

妻木における大工の系譜についても触れておきたい。大工号は、同門の間では重安・重道・重信というように１字を共通して名乗る傾向があり、系譜をたどる参考となる。妻木大工においては「重」の系統が６家、「国」の系統が３家ある。このうち「重」の系統では、今のところ妻木では明和２年（1765）の妻木村神明神社再建における堀田茂吉重勝が初出である。その堀田茂吉は、この作事も含めて知多郡切山村大工・久保忠兵衛重房と２度、同郡（布土村か）の平野秀蔵と１度共同で作事を行っており、知多の大工との接点が多かった人物であることが注目される。「重」の大工号が知多大工の久保忠兵衛重房と共通することが偶然ではなく、師弟関係を結んだことによるものだとすれば、妻木村の大工は、知多の大工から技術的な影響を受けてその後拡大していった可能性も考えられる。

５．知多大工の作事例と請負工程について

ほとんどの棟札では、年代・大工の氏名・大工号・作事内容程度しか情報が得られず、契約から竣工までの過程を詳細にうかがうことは難しいが、ある程度詳しく書かれた文献史料が残っている作事例も少数ながら存在する。ここでは多治見市新羅（しんら）神社と御嵩町愚渓寺の事例を紹介し、そこからうかがえる知多大工の作事請負工程を考察する。また、現存する建造物の事例として崇禅寺（そうぜんじ）鐘楼門、妻木八剣神社拝殿、安昌寺山門を挙げる。

① 新羅神社（147頁資料５、149頁写真図版１・２）

新羅神社は多治見市御幸町に所在し、素戔嗚尊（すさのおのみこと）・

八幡神・八王子神の三柱を主祭神として祀る。創建年代は不詳だが、現在残る棟札は、正保３年（1646）から昭和 13 年（1938）までの計 31 点である。

現在の社殿は権現造で、すべて嘉永元年（1848）に再建された時のものである。当時の史料として、弘化４年（1847）および嘉永２年（1849）の棟札、さらにこの作事に伴う弘化２年（1845）の仕様書が残る。

これらの史料の記載内容から、再建までの詳細な工程と報酬の支払い過程を見ることができる。まず、天保 12 年（1841）より再建費用の勧化帳を付け始め、その４年後にあたる弘化２年（1845）２月に手斧始めを行っているので、この時点から製材が始まったのであろう。契約時期は不明だが、手斧始めから１ヶ月後の３月付けで大工から仕様書が出されている。ここまでに手付金 30 両と材木納品時の金 40 両、さらに同年７月にも中金 30 両が支払われ、合計すると全請負金額の半金にあたる。

「午之春ヨリ取掛テ」の記述は、弘化３年（1846）春に柱立てと解釈すると、ここまでに基壇や亀腹等の基礎部分の普請が完了していたことになる。その後弘化４年（1847）11 月の奉納棟札は、釘穴があることから上棟に伴ったものとみられ、柱立てから２年弱が経過している。

さらに約１年後の嘉永元年（1848）冬までにあらまし「円成ス」とあり、仕様書に「残ハ主之処皆出来迄」と記された残り 100 両分の報酬は、この頃に支払われたものと思われる。嘉永２年（1849）１月付けの再建棟札（置札）は、遷宮式に伴ったものと推測する。

この造営の仕様書の署名は、知多郡片名村の大工甚吉とある。これは嘉永７年（1854）の妻木八剣神社拝殿再建棟札に見られる磯部甚吉郎重房と同一人物と考えられる。また、新羅神社上棟時に記したとみられる棟札には、知多郡の忠治・幸七・松蔵の名があり、村名は不記ながらも、甚吉（甚吉郎）配下の片名村出身者とみるのが順当であろう。

この時の再建作料の材料費込みで金 200 両は、当時の周辺寺社造営費用と見比べても、破格の巨費である[14]。これは当地方で特に権威のあった尾張藩御彫物師・早瀬長兵衛一族が、彫物部分を請け負っていることも関係していると思われる。また、葺師は可児市白髭神社本殿上葺棟札にもある犬山熊野町の小川磯右衛門久昌・小川平八久栄・小川伝右衛門久国らの一門で、遠く恵那市武並神社本殿葺替にも出向いていることから、やはり優れた職人であったと見ている。これらに見合う形で、大工も質の良い者が選定されたと考えられる。知多大工に対する当時の高い評価を示すものであろう。この造営に先立って、近隣の欠梁郷白山神社葺替や脇郷多度神社境内社・八幡神社修築に片名村大工が従事しており、その縁も大工の選定に影響を与えた可能性がある。

仕様書には組物の詳細や間数など建物の構造が明記されており、概ねこのとおりに仕上がっている。特に本殿の縁は四手先組物で支えられている点が珍しく、彫物だけでなく建物の構造自体も技巧が凝らされており、大工の技量の程がうかがわれる。

知多大工が手がけた建造物のうち、現存しているものは数少なく、この社殿は規模も大きい上に、詳細な工程が明らかとなっている貴重な事例といえる。なお、仕様書には絵図をともなっていたことが記されているが、残念ながら未発見である。（参考：多治見市編『多治見市史通史編上』1980、水野耕嗣『尾張藩御彫物師早瀬長兵衛木彫の軌跡』泉良 2008、『可児市の神社棟札集成』前掲、国立歴史民俗博物館編『社寺の国宝・重文建造物等棟札銘文集成－中部編－』1995）

② 愚渓寺（148 頁資料 6、149 頁写真図版 3・4）

愚渓寺は可児郡御嵩町に所在する古刹で、天保 11 年（1840）から弘化元年（1844）にかけて、現在地に伽藍を移転している。この時地元中村の大工棟梁利助と共同で従事したのが、知多郡矢梨村の棟梁亀三郎とその配下の大工である。その後、移転当時の本堂・庫裡は、近年になって建て替えられた。

移転工事の際の請書には７箇条の誓約が記されており、その内容とは、①火の用心、②用材に

関すること、③工事の際の片付けに関すること、④支払いに関すること、⑤大工の質の保証と無断で現場を離れないこと、⑥大工の風紀の厳守、⑦他の作業場との兼務の禁止についてである。新羅神社と同じくここでも絵図面が添付されていたらしい。

⑤と⑦の項には他所へ無断で大工を派遣しないことをわざわざ明記していることから、この集団もしくは他の大工も含めて一般的に他の作業場も掛け持ちで抱えるケースがあった可能性をうかがわせる。

報酬の支払についても言及しており、各棟梁の出身村の庄屋を保証人に立てている。保証人を立てる他の事例としては、享和3年（1803）の多治見市奥蔵寺観音堂再建においても、地元池田町屋村大工・野村専右衛門国信の保証人として同村庄屋が署名している[15]ので、庄屋が保証人となるのは、それほど特別なことではないと思われるが、大事業ゆえの慎重さがうかがわれる。（参考：御嵩町教育委員会編『御嵩町の文化財』1980、東濃新報「今昔日記」41　1965年5月18日付掲載記事）

③ 崇禅寺鐘楼門（150頁写真図版7）

崇禅寺は妻木町に所在する臨済宗妙心寺派の寺院で、文和3年（1354）仏徳禅師の法嗣の果山正位を開山として創建した。近世初頭は旗本妻木家の菩提寺となり、境内に霊廟があるほか、代々の位牌が残っている。

鐘楼門は、山門から石段を上がった場所に位置し、宝暦5年（1755）建立当時のものが現存している。建立に至った経緯は、日東家文書によれば、同寺の鐘が老朽化していたことにより新調するにあたって、それまでの鐘楼では矮小であったことと、あわせて山門が廃壊してしまっていたことから、それらを一つにした鐘楼門を建立することになったものである。また、当時は同寺の創建から約400年の節目にあたっていたことも背景としてあった可能性が考えられる。

この作事を担った大工は知多郡切山村の久保忠八郎で、6月22日に竣工している。彼は同年1月に妻木村那須家の氏神社も建立し、さらにさかのぼって寛延3年（1751）には同村内八剣神社本殿の作事を行うなど、妻木村と縁が深く、幾度も足を運んでおり、余程腕を買われていたとみられる。

構造としては、この周辺の地域では比較的規模が大きな門である。屋根は入母屋造の檜皮葺だが、古絵図では瓦葺の描写もあり、当初がどちらであったのかは定かではない。柱は1階部分が角柱だが、2階は円柱とし、上端部は禅宗様の粽としている。彫物は木鼻の唐草文程度に留まり、寺の落ち着いた雰囲気に調和している。築250年を超えてなお目立った傷みはなく、保存状態は良好である。

④ 妻木八剣神社拝殿（150頁写真図版8）

八剣神社は旧妻木村内の島ごとに祀られている社の一つで、鍛冶ヶ入・掛花の両島を氏子としている。棟札は慶安2年（1649）からの25点が伝わっている。これらのうち5点で布土村・切山村・片名村等の出身者の名を見ることでき、一社でこれほど何度も知多の大工が作事で関わりを持った例は外にない。

現存の拝殿は嘉永7年（1854）に再建され、後に昭和27年の修理を受けている。桁行3間梁間2間、平入り入母屋造瓦葺の簡素な建物である。懸魚および木鼻以外では特に彫物はない。

この拝殿を手がけた大工は、新羅神社の項で触れた片名村の磯部甚吉郎重房である。彼は同年の3月および6月には八幡神社穀蔵土蔵改修などの作事も子息米次郎と共に従事している。

⑤ 安昌寺山門（150頁写真図版9）

安昌寺は長久手町に所在する曹洞宗の寺院で、天正元年（1573）の創建とされる。旧本堂は棟梁斎藤定七之純以下切山村の5人の大工が手がけたものだったが、昭和55年の建て替えですでに失われている。

山門は文久3年（1863）に建立されたもので、棟札には大工として愛知郡山口村の大津磯右衛門重嗣と知多郡切山村の斎藤桂助永寛の名が記されている。その後昭和55年に屋根部分と控柱の修

理が行われた。

門の形式は薬医門で、主柱上に渡された縦幅の広い巨大な冠木により、正面から見た際に重厚な印象を受ける。彫物は両側面に波形の笈形が付けられている。（参考:『長久手町史　資料編３　文化財』1986）

⑥ 知多大工の請負工程

新羅神社と愚渓寺の事例では、絵図を伴った見積書・仕様書・請書によって具体的な建築仕様を示し、報酬の支払方法や金額を明記している。遠方であるがゆえに、施主や地元との間に無用な心配や摩擦が生じないよう非常に神経を使っていたことがうかがえる。これらの文書・棟札から工程を推測すると、下記の図のような請負モデルが考えられ、非常に近代的で合理的な方法がとられている。江戸時代後期に当地方で一世を風靡した立川流は、きわめて近代的な請負方式が特徴の一つとして挙げられている[16]が、知多の大工も同様に、技量だけでなく、こうしたきめ細かな契約上の信頼性も東濃地方で多くの作事請負を獲得できた一つの要因だったのではないだろうか。

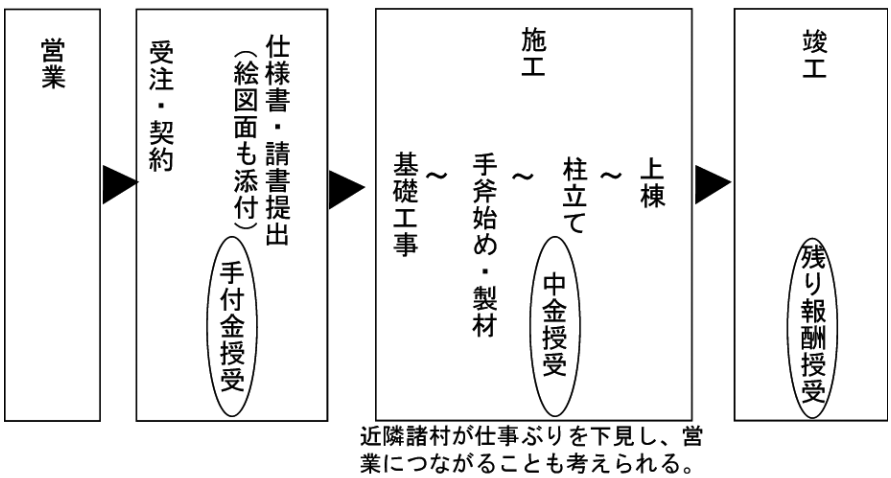
知多の大工の請負の単位は、効率面で考えても、個々の大工ではなく村や一門など組織的に行っていたと考える。その根拠としては、第１に先述の新羅神社社殿の造営では、仕様書と上棟棟札に記載された大工名が異なっている。第２に妻木村内の作事においては、個々の家系によらず村単位での請負の推移が見られた。仮に個々の大工が独自に営業をしていたとすれば、もっと諸村がランダムに請け負う傾向となっていたはずである。

具体的なモデルとして、あらかじめ一定範囲の村々を代表者がまわって、受注を受けて知多から必要な人数を派遣する方法や、大野鍛冶のように拠点となる寄宿先を設定して一定人数の大工が来訪し、近隣から受注する方法が考えられる。知多大工がどのような組織を持っていたかは、今のところ不明な状況だが、今後文書などの史料が発見されれば、改めて検討したい。

６．東濃地方で知多出身大工が従事した背景

知多の大工が出稼ぎで仕事をすることは、地元の大工にとっては自身の生計を脅かす恐れがあったはずであるし、地元経済にとっても貨幣流失という意味ではマイナス要因となりうる。それでも知多の大工が東濃地方においてこれほどの数の作事に従事した背景とは、何だったのだろうか。

最も考えられるのは、技術的な優越である。新羅神社や愚渓寺移転のような大事業に関わっていることはそれを裏付けているし、妻木村においても、江戸時代中期において再建などの大がかりな作事を中心に、ほとんどが地元大工の配下ではな



知多大工の請負モデル

く単独で請け負っている。それは単に安価な労働力として地元大工の人手不足を補うというよりも、技術面での高い信頼を示していると考える。具体的に地元大工と比較してどのような優越点があったのかは、残念ながら比較検討ができるような現存する建造物がほとんどない上、知多全体の大工の技術を一括りにできるかもわからないので、言及することは難しいが、現時点で仮説として考えられる要素として以下を挙げたい。

① 経験と技術の蓄積

知多の大工稼ぎがいつ頃まで遡ることが可能かは定かではないが、近世東濃の棟札に見られるだけでも、何世代にもわたって相当数の作事に関わっていたのは確実であろう。

② 大勢の大工を抱え多様な建築内容を適材適所で派遣する動員力

知多の大工の組織がどのようなものであったのかは、現地側の研究が進められていないので定かではないが、特に切山のように大工が多くいた村では、大規模な作事に対し、一度に大勢の大工を送り込むことが可能だったであろう。また、近世の大工仕事は分業化が進んだが、可児市星宮神社では「鳥居大工」と記した棟札も見られるように、多様な建築内容を総合的に請け負って適材適所で動員が可能であったとすれば、個々の地元大工よりも優位に立てた部分ではないだろうか。

③ 知多の船大工で培われた精密な技術

船大工の加工技術は、知多半島特有のもので、通常の社殿等の造営以上に精密さが要求されるが、今のところ社殿等の建築に流用された証拠となる資料は見いだせない。

④ 大野村の鍛冶集団に近いことにより、優れた鉄製工具が入手しやすかった環境

黒鍬稼ぎが発達した理由の一つが、知多の鍛冶が鍛造した大型で特殊な鍬にあった。今のところ知多の民俗資料の大工道具は、船大工のもの以外で筆者は確認できていないが、知多の鍛冶職人は大工道具も製造していたとされており、[17] 大工にも同様な事情が当てはまる可能性があるのではないか。

⑤ 黒鍬職人との連携による石垣普請や基壇整備などの土木工事との組み合わせ

妻木八幡神社において、黒鍬職人が石段などの仕事も請け負っていたことが確認できている。黒鍬の仕事は棟札には記されないため、ほとんど表に出ることはないが、東濃地方各地で相当数の普請に従事していたと考える。また、先述の愚渓寺移転工事においては、請書に「地形より建前瓦葺、壁上塗、諸雑作、高塀まで相違なく出来仕るべく候」とあり、整地から仕上げまで一貫して請け負ったとみられる記述である。

一方、知多大工側が東濃を行き先に選択した理由としては、政治的な背景として出稼ぎを行いやすい環境があった可能性も考えられる。作事行為に対する規制が施された事例を挙げると、長州萩藩では寺社の作事の際、規模や構造、古材使用の有無などが厳密に定められ、事前に寺社奉行所へ申請が義務づけられていた[18]。また、経済的な面においても、地域によっては産業振興とそれに伴う自領大工の営業権益保護の統制がある。畿内６国においては、中井役所が領域内の作事において他国大工の流入を厳しく取り締まっていたことが知られている[19] し、尾張藩領の廿原村・三之倉村・小木村においては、幕末期には他国からの大工の入職を禁じ、その遵守を促す廻文が残っている[20]。

可児郡・土岐郡は天領・旗本領・尾張藩領がほとんどで、今のところ萩藩のような細かい統制や、尾張藩の知多大工が活動する上で支障となるような規制があったことを示す史料は知られていない。こうした規制が及ばず、営業に障害のない環境にあったことが、出稼ぎ先として東濃地方を選択した理由の一つであったことが想定される。

また、大工だけでなく黒鍬や大野鍛冶も東濃を出稼ぎ先の一つとしており、知多地方以外でも泉州や信州高遠の石工も当地方で石鳥居や灯籠などを数多く建造している。このように外部の様々な業種の人々に対して開かれた地域性が土壌として存在していたことにより、それぞれの出稼ぎの

ルートとして確立されたということではないだろうか。

7．今後の課題

本稿では、知多大工の作事例から、現時点で想定される活動の様相や背景を述べたが、先行研究に乏しく、その裏付けは不十分であることは否めない。知多大工を受け入れた村と受け入れなかった村の有無とその理由、妻木村以外での地元大工との関係、営業の方法と範囲、地元大工との技術的な違いなど、なおも未解明な部分が多い。今後東濃地方および三河地方の棟札の調査をより一層進めることにより、広域的な分析に基づいた検討が必要である。

一方、知多側においても出稼ぎの出入記録や絵図面などの文献史料、大工道具などの民俗資料、知多大工による地元での作事例、世襲など大工の系譜と一門の組織編成のあり方、黒鍬や鍛冶集団との関わりなどの調査研究が求められる。出稼ぎ大工を送り出した側と受け入れた側の双方で情報や研究をフィードバックさせていくことで、知多大工の活動の実態を次第に明らかにしていくことが可能と考える。

また、大工だけにとどまらず、農鍛冶や黒鍬などの出稼ぎルートとも重なっていることが示すように、遠隔地の地域同士の多面的な交流としてとらえていく視点も必要であろう。

近世の建造物は、現時点では文化財指定されることが少ないないため、老朽化すれば建て替えられ、失われてしまうことが多い。その意味では知多大工が関わった建造物の調査は、年々究明していくことが難しくなっていく状況に置かれている。このまま知多大工の業績が風化してしまうことは惜しまれるので、今後研究が活発となることを望んでいる。その思いから本稿ではあえて不確定な要素を含む部分にも踏み込んだが、今後新たな知見が得られれば、再検討していきたいと思う。

謝辞

本稿は、平成22年2月に実施された土岐市教育委員会主催「ふるさと講座」において筆者が講演した内容を元に、知多大工に関する部分を中心に加筆修正し、まとめたものである。

本研究にあたっては、妻木城址の会主宰の黒田正直氏には、会で長年蓄積されたデータを利用させていただいただけでなく、様々なご助言や調査のご協力をいただいた。また、知多側の情報については、日本福祉大学知多半島総合研究所の曲田浩和氏、南知多町の山下勝年氏、美浜町教育委員会の宮向好明氏のご教示をいただいた。末筆ながら記して感謝申し上げたい。

平成23年9月26日

注一覧

（1） 可児市史編纂室『可児市の神社　棟札集成』2010。

（2）『美浜町誌　本文編』1983、春日井市教育委員会文化財課「平成10年度民俗企画展　春日井の農鍛冶」1999。

（3） 知多市誌編さん委員会『知多市誌本文編』1981、篠宮雄二「尾州知多郡大野鍛冶について」『知多半島の歴史と現在　No.8』校倉書房1997、小林茂「「黒鍬」雑考」『伊勢湾考古』18　2004など。

（4） 名古屋市蓬左文庫編『尾張徇行記』第6巻名古屋市教育委員会1976　切山村の項より。なお、仮名部分はカタカナからひらがなにし、句読点・濁点を付加した。

（5）『美浜町誌　本文編』（前掲）。

（6）『美浜町誌　本文編』（前掲）において、古布村百姓他出人別書上帳の記載例として尾州打渕村・犬山・岩倉村・清須、三州吉田駅田町、濃州下森村が行き先となっていることが紹介されているが、これ以外は具体例が見あたらない。

（7）『可児市の神社　棟札集成』（前掲）においても、遠隔地の知多などの大工が活動するようになる理由は不明とされており、『尾張徇行記』の記載等については触れられていない。

（8） 長久手町史編纂委員会編『長久手町史　資料編7』1989。

（9） 日本福祉大学知多半島総合研究所・曲田浩和氏のご教示による。

(10) 鈴木源一郎編『豊橋市神社棟札集成』愛知県神社庁豊橋支部　2001。
(11) 篠宮雄二「尾州知多郡大野鍛冶について」前掲。
(12) 山野の一部を削り取って土を持ちだして大きな畑を造成したり、棚田をならして一枚の田につくりかえる「畝まし」や、水田の水漏れを防ぐために土を練って粘りを出す「床しめ」は、黒鍬職人が得意とした技術である（『近世出かせぎの郷』知多町文化財資料第８集　知多郡知多町教育委員会　1966）。
(13) 妻木八幡神社文書より。
(14) 例えば享和３年（1803）多治見市上野町奥蔵寺観音堂再建で金12両２分に扶持米４石、安政５年（1858）春日井市内津町内津妙見宮護摩堂建立で金70両である。
(15)「奥蔵寺観音堂再建請書」『多治見市史　在地史料編』所収。
(16) 伊藤龍一「立川流の大工とその彫物」『社寺彫刻　立川流の建築装飾』淡交社　1994。
(17)「知多の匠の工人達～大野鍛冶～」鍛造技術の館　大野鍛冶コーナー副読本。
(18) 妻木宣嗣「萩藩における寺社建築物に対する建築規制と作事申請手続き上の違反について―萩藩の建築規制に関する研究　その１―」『日本建築学会計画系論文集』第541号　2001、妻木宣嗣「17世紀後期～18世紀前期、萩藩の武家屋敷に対する申請規定を通してみた建築行政について」『日本建築学会計画系論文集』第592号　2005。
(19) 木場明志「宗祖に出遇うご修復 - 本山両堂ご修復を通して -（9）寛政度再建への職人派遣」お東ネット http://www.ohigashi.net/oshiete_goshufuku09.html
(20)「池田町屋村大工取締方廻文」『多治見市史　在地史料編』525頁所収。

資料1. 東濃地方とその周辺の作事にみられる知多出身大工一覧表（年代順）

大工名には出身村別の記号を付加し、作事内容側は妻木村内の作事のみ左に同じものを付している。なお、藤原姓は省略している。

No	元号	西暦	月	大工名（出身村ごとに記号付加）	作事内容（妻木村のみ記号付加）
1	享保13	1728	4	□ 長田清高（知多郡布土村）	土岐市鶴里町白鳥神社境内社白山神社上葺
2	享保13	1728	6	□ 長田清高（知多郡布土村）	土岐市鶴里町柿野中町稲荷神社上葺
3	享保17	1732	4	□ 長田次郎右衛門久定（知多郡布土村）	□ 土岐市妻木町八剣神社造宮
4	享保19	1734	4	□ 長田次郎兵衛（知多郡布土村）	□ 土岐市妻木町大光神社神明宮葺替
5	享保19	1734	5	□ 長田次郎右衛門久定（知多郡布土村）	□ 土岐市妻木町南宮神社造宮
6	享保19	1734	11	● 山崎八兵衛、助左衛門（知多郡切山村）	瑞浪市陶町水上神社諏訪大明神瑞垣・大鳥居上葺建立
7	元文1	1736	9	● 山崎八兵衛（知多郡切山村）	瑞浪市陶町諏訪大明神本堂上葺・瑞垣之鳥居上葺・大鳥居柱替
8	元文1	1736	12	○ 山本甚助（知多郡坂井村）	○ 土岐市妻木町大光神社神明社造立
9	元文4	1739	9	● 竹本利平（知多郡切山村）	多治見市廿原神明神社造立
10	寛保3	1743	6	□ ■江甚蔵（知多郡布土村）	土岐市鶴里町細野北之前白山神社改建
11	寛保3	1743	6	□ ■江甚蔵（知多郡布土村）	土岐市鶴里町細野東之前八幡神宮改建
12	寛保3	1743	6	□ ■江甚蔵（知多郡布土村）	土岐市鶴里町細野長総神明神社改建
13	寛延2	1749	9	● 久保忠八郎重国（知多郡切山村）	多治見市土合神明社葺替
14	寛延2	1749	9	□ 栗田芦大夫、稲生円助、稲生半平（知多郡布土村）	長久手町景行天皇社造営
15	寛延3	1750	4	● 久保忠八郎（知多郡切山村）	● 土岐市妻木町八剣神社本殿造営
16	寛延4	1751	6	□ 長田武八郎（知多郡）※布土村か？	□ 妻木東部神明神社葺替
17	寛延4	1751	9	● 武内■■道■（知多郡切山村）	多治見市上生田権現宮修復
18	宝暦4	1754	11	● 利平・小工 藤吉・伊助・甚吉（知多郡切山村）	多治見市長福寺観音堂再建（工期は宝暦2年春より3年、大工370工）
19	宝暦5	1755	1	● 久保忠八郎（知多郡切山村）	● 土岐市妻木町那須家氏神社造立
20	宝暦5	1755	6	● 久保忠八郎（知多郡切山村）	● 土岐市妻木町崇禅寺鐘楼門再建（※現存）
21	宝暦9	1759	8	◇ 井戸田源六（知多郡小倉村）　※葺師	多治見市本土神社葺替
22	宝暦10	1760	4	● 久保忠兵衛重房・久保清重郎重政（知多郡切山村）	多治見市土合神明神社再建
23	宝暦10	1760	7	● 山崎定八郎（知多郡切山村）	陶町水上神社諏訪神社本社等上葺
24	宝暦11	1761	4	□ 木助・要助・長蔵・和吉（東大高村）、半十郎・伝蔵・長蔵・半平・茂八（布土村）	長久手町常照寺本堂建立
25	明和2	1765	3	● 堀田茂吉（妻木）、九方（久保）忠兵衛（知多郡切山村）	● 土岐市妻木町須後神明神社内稲荷社再建
26	明和3	1766	3	● 久保利平（知多郡切山村）	多治見市廿原神明神社上葺
27	明和4	1767	不記	● 久保半助好造（知多郡切山村）※鳥居大工	可児市広見星宮鳥居建立
28	明和5	1768	11	□ 棟梁　堀田茂吉重信（妻木村）、平野秀蔵（知多郡　※布土村か）	□ 土岐市妻木町神明天満宮再建
29	明和5	1768	8	● 斎藤清八政重・正八・弥助・源八（知多郡切山村）	可児市久々利八幡神社太神宮再造・白山権現宮再造
30	明和6	1769	9	● 堀田茂吉重信（妻木）、久保忠兵衛・同 源吉（知多郡切山村）	● 土岐市妻木町八剣神社本殿造営
31	明和7	1770		● 斎藤半七（知多郡切山村）	多治見市大原庚申堂再建
32	明和7	1770	8	● 山崎定八郎（知多郡切山村）	瑞浪市陶町牛頭天王社・井垣造営
33	明和7	1770	8	● 山崎定八郎、久保忠兵衛、清谷豊八郎、上田惣吉（知多郡切山村）	瑞浪市陶町水上神社山王社再造立・諏訪神社造立
34	明和8	1771	2	● 久保忠三郎（知多郡切山村）	可児市西帷子神明神社本殿修復
35	明和9	1772	4	● 久保忠三郎義成（知多郡切山村）	可児市今八幡神社鳥居建立
36	安永5	1776	6	●☆ 久保弥助重房（切山村）・次田与七光重（古布村）	可児市広見星宮鳥居再建
37	安永5	1776	11	● 久保善四郎（知多郡切山村）	● 土岐市妻木町門田稲荷神社再興
38	安永7	1778	6	▲ 山口伊助（知多郡須佐村）	多治見市廿原神明神社建立
39	安永8	1779	12	▲ 山口伊助・安藤太七（知多郡須佐村）	多治見市土合神明社
40	安永9	1780	2	△ 源吉（「知多郡屋田」知多郡奥田村もしくは矢田村）	◇ 土岐市妻木町八剣神社造営
41	天明5	1785	8	？ 源蔵行綱・同 忠助秀房（知多郡）	多治見市元昌寺鎮守諏訪大明神社葺替
42	天明5	1785	10	□ 平野円蔵（知多郡布土村）	□ 土岐市妻木上郷虚空蔵尊修復
43	天明6	1786	7	● 竹藤定吉（知多郡切山村）	土岐市鶴里町柿野白鳥神社境内社白山神社上葺
44	寛政3	1791	8	◆ 八十八正次（知多郡乙方村）	多治見市多度神社修復造立・上棟時の木槌も残る
45	寛政5	1793	9	●◆ 林蔵（乙方村）・斎藤林助（切山村）	長久手町石作神社渡殿建立
46	寛政5	1793	9	● 藤清八春正（知多郡大高村）、藤蔵（同七方村）、斎藤林助（同切山村）	長久手町石作神社本殿建立
47	寛政8	1796	3	□ 平野円蔵（知多郡布土村）	□ 土岐市妻木町瓜内社　広田神社建立
48	寛政10	1798	9	□ 長蔵（知多郡布土村）、門人 銀蔵（愛知郡野方村）	長久手町摂津神明社上葺
49	寛政11	1799	9	◆ 鈴木八十八郎■富（知多郡乙方村）	土岐市定林寺白山宮再建
50	享和1	1801	11	● 棟梁　斎藤定七之純・斎藤林助・斎藤友蔵・石川伝吉・斎藤忠助（知多郡切山村）	長久手町安昌寺旧本堂開山堂再建
51	享和3	1803	4	● 家田伝右衛門吉忠（知多郡切山村）	可児市下恵土熊野神社鳥居再建
52	文化4	1807	7	● 金久（知多郡切山村）	多治見市諏訪町薬師堂再建
53	文化8	1811	12	□ 長田要八（知多郡布土村）・伊藤弥重良（村名不詳）	土岐市鶴里町柿野白鳥神社境内社白山神社再建立

No	元号	西暦	月	大工名(出身村ごとに記号付加)	作事内容（妻木村のみ記号付加）
54	文化11	1814	12	？　伝吉（知多郡）	可児市広見諏訪・松尾大明神拝殿再建
55	文化12	1815	3	●　家田■■（切山村）	可児市広見若宮八幡大菩薩再造
56	文政1	1818	9	☆　吉蔵重興・惣吉■■・伊藤為吉・伊藤吉五郎（知多郡古布村）	可児市中恵土子守神社拝殿造建
57	文政7	1824	11	●　久保忠八郎（知多郡切山村）	多治見市本土神社再建
58	文政9	1826	不記	★　磯部萬吉（知多郡片名村）	多治見市欠梁白山神社葺替
59	文政10	1827	9	●　家田伝吉（知多郡切山村）・斎藤藤助	多治見市元昌寺鎮守諏訪大明神社葺替
60	文政10	1827	9	●　家田伝吉（知多郡切山村）	多治見市元昌寺鎮守妙見宮社葺替
61	文政12	1829	9	●　家田伝吉忠利（知多郡切山村）	可児市中恵土子守神社鳥居再建
62	天保3	1832	8	★　磯部弥七郎（解読文「日名村」片名村の誤りか）	多治見市多度神社境内社八幡神社修築
63	天保9	1839	4	●　家田幸三郎（知多郡切山村）	多治見市元昌寺鎮守弁財天社造立
64	天保11	1840	1	▼　棟梁亀三郎・棟梁脇仙吉（知多郡矢梨村）、棟梁利助（可児郡中村）	御嵩町愚渓寺移転再建（請書）
65	弘化2	1845	3	★　甚吉（知多郡片名村）、利平（名古屋前津小林村）	多治見市新羅神社仕様書（※現存）
66	弘化4	1847	12	★　忠治　幸七　松蔵（知多郡片名村か）	多治見市新羅神社奉納棟札
67	嘉永7	1854	3	★　磯部甚吉郎重房（知多郡片名村）	★　土岐市妻木町八剣神社拝殿再建　（※現存）
68	嘉永7	1854	3	★　甚吉・同倅米次郎（知多郡片名村）	★　土岐市妻木町八幡神社土蔵裏石蔵大庇造作
69	嘉永7	1854	6	★　磯部甚吉（知多郡片名村）	★　土岐市妻木町八幡神社穀蔵土蔵改修
70	安政3	1856	9	★　米次郎・彦兵衛（知多郡方名村）	★　土岐市妻木町八幡神社土蔵屋根瓦葺改修
71	安政4	1857	1～5	★　米次郎(知多郡片名村)	★　土岐市妻木町水車屋普請
72	万延1	1860	12	★　竹味幸七郎重信、竹味多吉、渡辺万蔵（知多郡片名村）、中嶋作重郎正誠他（曽木村）	土岐市下石町八剣神社拝殿再建
73	文久1	1861	8	？　棟梁　野村李頭国筠（池田町屋村）、塚本鉄治郎（知多郡）ほか小工多数	？　土岐市妻木町南宮神社再建
74	文久3	1863	11	●　大津磯石衛門重嗣（愛知郡山口村）、斉藤桂助永寛（知多郡切山村）	長久手町安昌寺山門再建(※現存)
75	明治10	1877	2	★　磯部兵九郎（知多郡片名村）	★　土岐市妻木町西木戸山神社葺替
76	明治10	1877	2	★　磯部兵九郎（知多郡片名村）	★　土岐市妻木町春日神社境内社神明社・金比羅社・箱崎社・高山社葺替
77	明治10	1877	12	★　磯部兵九郎（知多郡片名村）	★　土岐市妻木町愛宕社
78	明治10	1877	7	★　磯部兵九郎（知多郡片名村）	★　土岐市妻木町神宮神明神社　神明社葺替
79	明治10	1877	7	★　磯部兵九郎（知多郡片名村）	★　土岐市妻木町城山八幡神社上葺
80	明治26	1893	1	？　平林重太郎（知多郡）	？　土岐市妻木町門田白山神社拝殿改築
81	明治30	1897	2	◎　大沢伊之太郎（知多郡阿久比村大字卯坂）	可児市今渡市杵島神社本殿改造・玉垣・神橋創建

※No59斎藤藤助は嘉永3年（1850）南知多町篠島神明神社・同八王子社棟札に名がみられる。

参考文献

多治見市/編『多治見市史　在地史料編』1976
加藤利雄・村瀬五郎/編『多度神社沿革誌』1988
多治見市図書館郷土資料室/編『市内各神社明細帳・棟札写し・他』
『当所当山鎮守神社棟札記他(元昌寺)』1780
多治見市図書館郷土資料室/編『本土神社社史資料』
多治見市教育委員会/編『廿原神明神社棟札調査』
長久手町史編纂委員会/編『長久手町史　資料編3』1986
長久手町史編纂委員会/編『長久手町史　資料編7』1989
可児市史編纂室/編『可児市の神社棟札集成』2010
東濃新報/編「東濃の名工作十郎　今昔日記41」1965年5月18日付『東濃新報』記事
南知多町誌編纂委員会/編『南知多町誌　資料編6』南知多町1997
鶴里町誌編纂委員会/編『山なみ遙か祈りの道ー中馬の里ー』1983

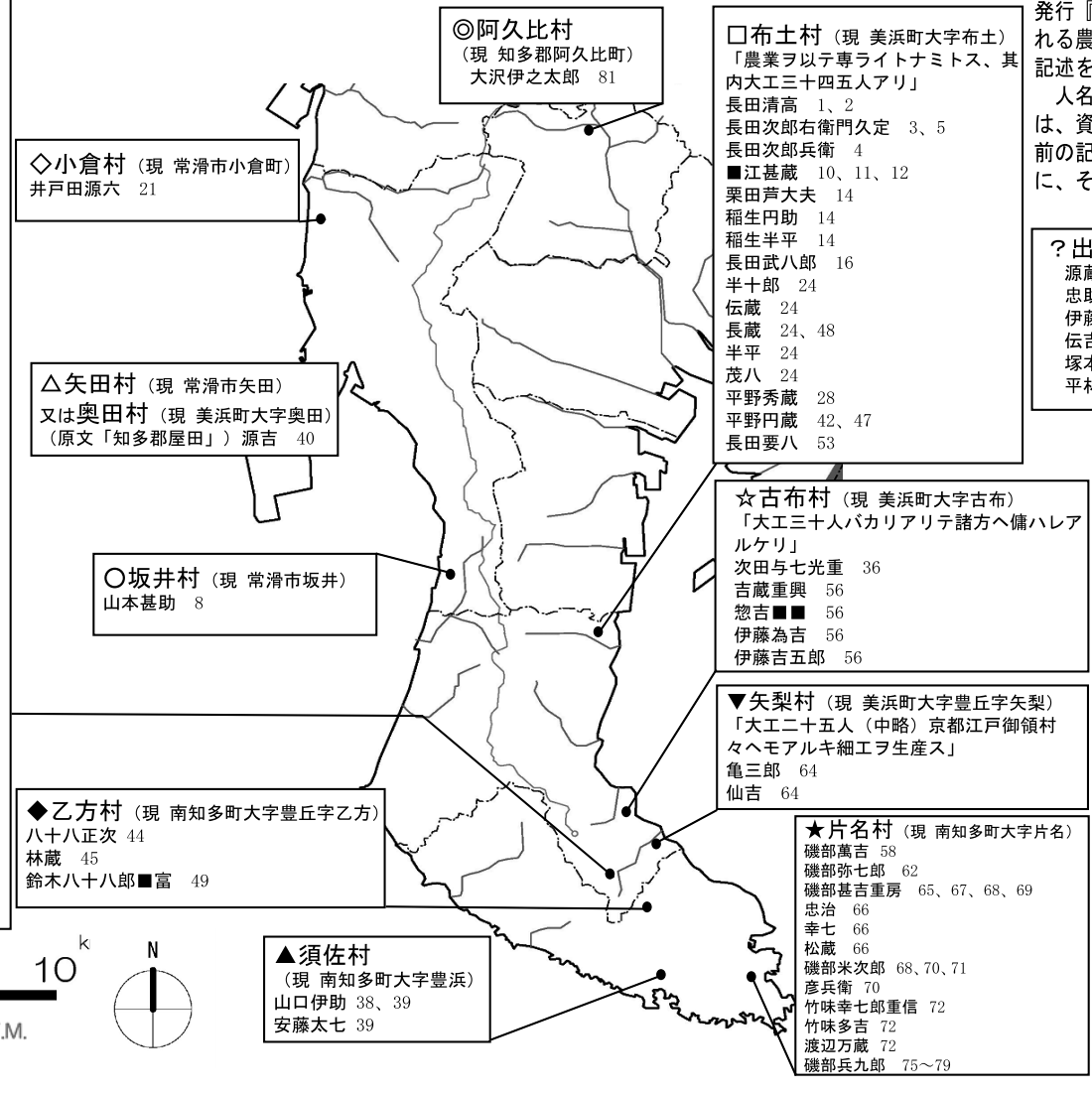
※土岐市・瑞浪市分は、妻木城址の会が調査・整理した情報に基づいている。

資料2　東濃等の作事にみられる知多郡出身大工と『尾張徇行記』の記載内容

凡例

カギ括弧内は、天保2年発行『尾張徇行記』に見られる農間稼ぎ大工に関する記述を記した。

人名の後に併記した数字は、資料1のNoに、村名の前の記号は同じく村別記号に、それぞれ対応している。



Copyright(C)2011 KD T.M.
All Rights Reserved.

●切山村
（現 美浜町大字豊丘字切山）
「農業バカリニテハ渡世ナリガタク大工二十四五人アリテ三州濃州アタリマデモ傭ワレユキ産業トス」
山崎八兵衛　6、7
助左衛門　6
竹本利平　9
久保忠八郎重国　13、15、19、20
武内■■道■　17
利平　18
藤吉　18
伊助　18
甚吉　18
久保忠兵衛重房　22、25、30、33
久保清重郎重政　22
山崎定八郎　23、32、33
久保利平　26
久保半助好造　27
斎藤清八政重　29
正八　29
弥助　29
源八　29
久保源吉　30
斎藤半七　31
清谷豊八郎　33
上田惣吉　33
久保忠三郎義成　34、35
久保弥助重房　36
久保善四郎　37
竹藤定吉　43
斎藤林助　45、46、50
斎藤定七之純　50
斎藤友蔵　50
石川伝吉　50
斎藤忠助　50
家田伝右衛門吉忠■　51
金久　52
家田■■　55
久保忠八郎　57
家田伝吉忠利　59、60、61
斎藤藤助　59、篠島神明神社棟札
家田幸三郎　63
斉藤桂助永寛　74

◎阿久比村
（現 知多郡阿久比町）
大沢伊之太郎　81

◇小倉村（現 常滑市小倉町）
井戸田源六　21

△矢田村（現 常滑市矢田）
又は**奥田村**（現 美浜町大字奥田）
（原文「知多郡屋田」）源吉　40

○坂井村（現 常滑市坂井）
山本甚助　8

◆乙方村（現 南知多町大字豊丘字乙方）
八十八正次　44
林蔵　45
鈴木八十八郎■富　49

▲須佐村
（現 南知多町大字豊浜）
山口伊助　38、39
安藤太七　39

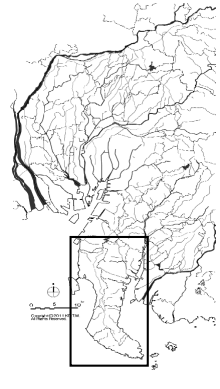
□布土村（現 美浜町大字布土）
「農業ヲ以テ専ライトナミトス、其内大工三十四五人アリ」
長田清高　1、2
長田次郎右衛門久定　3、5
長田次郎兵衛　4
■江甚蔵　10、11、12
栗田芦大夫　14
稲生円助　14
稲生半平　14
長田武八郎　16
半十郎　24
伝蔵　24
長蔵　24、48
半平　24
茂八　24
平野秀蔵　28
平野円蔵　42、47
長田要八　53

☆古布村（現 美浜町大字古布）
「大工三十人バカリアリテ諸方ヘ傭ハレアルケリ」
次田与七光重　36
吉蔵重興　56
惣吉■■　56
伊藤為吉　56
伊藤吉五郎　56

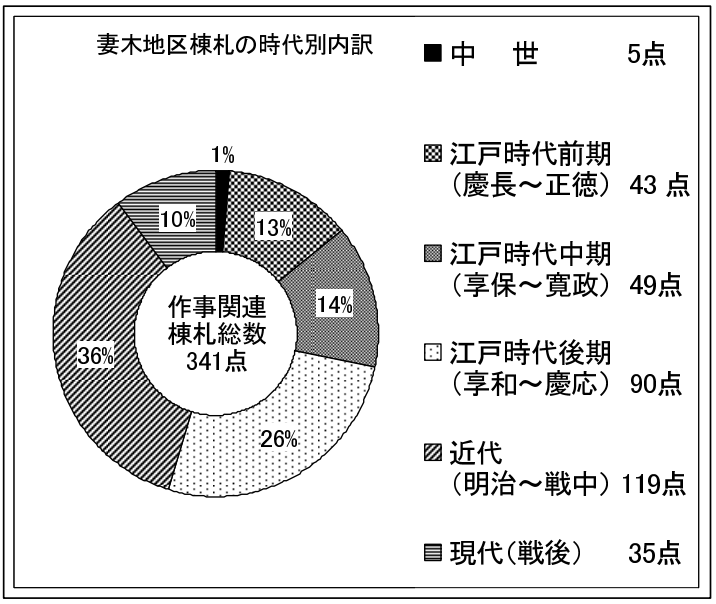
▼矢梨村（現 美浜町大字豊丘字矢梨）
「大工二十五人（中略）京都江戸御領村々ヘモアルキ細工ヲ生産ス」
亀三郎　64
仙吉　64

★片名村（現 南知多町大字片名）
磯部萬吉　58
磯部弥七郎　62
磯部甚吉重房　65、67、68、69
忠治　66
幸七　66
松蔵　66
磯部米次郎　68、70、71
彦兵衛　70
竹味幸七郎重信　72
竹味多吉　72
渡辺万蔵　72
磯部兵九郎　75～79

？出身村不明者
源蔵行綱　41
忠助秀房　41
伊藤弥次良　53
伝吉　54
塚本鉄治郎　73
平林重太郎　80



資料3.妻木村の作事関連棟札の点数と割合



資料4. 妻木の近世棟札に見られる大工の出身地一覧

凡例：　数字は作事件数で、大工ののべ人数ではない。異なる区分の出身が複数記載されている場合は、各1点として数えている。なお、文書史料の分は含めていない。

建立・・・再建・造立・建立・新造・造宮・改造の記載のもの
葺替・・・上葺・葺替・修覆・屋根換の記載のもの

江戸時代前期（慶長～正徳年間　1603～1715）

	妻木	近隣	名古屋	知多	その他	不詳	無記載	計
建立	1	3	0	0	1	10	9	24
再興	0	0	0	0	0	4	2	6
遷宮	1	0	0	0	0	1	2	4
葺替	1	0	0	0	0	2	6	9
計	3	3	0	0	1	17	19	43

江戸時代中期（享保～寛政年間　1716～1800）

	妻木	近隣	名古屋	知多	その他	不詳	無記載	計
建立	6	0	1	10	0	0	3	20
再興	1	0	1	1	0	1	2	6
遷宮	1	0	0	0	0	1	0	2
葺替	10	3	0	3	0	0	7	23
計	18	3	2	14	0	2	12	51

江戸時代後期（享和～慶応年間　1801～1867）

	妻木	近隣	名古屋	知多	その他	不詳	無記載	計
建立	10	3	4	2	0	4	7	30
再興	3	0	0	0	0	1	1	5
遷宮	5	0	1	0	0	0	0	6
葺替	28	3	0	0	2	2	15	50
計	46	6	5	2	2	7	23	91

資料5　新羅神社の現社殿造営関連資料

社殿再建の年表（資料①～③をもとに作成）

天保12年（1841）		再建のための寄付金を募り始める
？		大工に依頼、手付金30両支払い
？		材木納品、大工に40両支払い
弘化2年（1845）	2月	手斧始めの儀式、製材始まる
	3月	大工が氏子に仕様書を提出
	7月	大工に30両支払い
弘化3年（1846）	春	柱立て
弘化4年（1847）	11月	奉納（上棟式か）
嘉永元年（1848）	冬	ほぼ竣工、大工に100両支払い
嘉永2年（1849）	1月	棟札（遷宮式か）

①御本社仕様書覚

御幸町三　西浦泰治氏所蔵（『多治見市史　在地史料編』より）

御本社仕様書覚

一　本社　壱棟　但シ腰三手先・上弐手先

五尺　右流れ作り

一　拝殿　壱棟　但シ腰組なし・上出組

弐間三間　右唐様作り、御拝唐破風、外二渡り付、棟数都合三棟、委敷は図面之通り、但し上下共升壱重ツゝ減シ

一　材木金物大工木挽手間扶持作料、出来迄代金弐百両相極メ、則手付金三拾両、材木着之砌り金四拾両、当七月金三拾両、残ハ主之処皆出来迄、右之通り御引合申上候間、為其仕様書仍而如件

弘化二年巳三月　知多郡片名村　大工甚吉

名古屋前津小林　大工利平㊞

西浦道助様　酢屋桂助様　御氏子中様

②弘化四年奉納棟札

末十一月吉日　奉納棟札　弘化四年

知多郡大工　忠治　幸七　松蔵

尾州名古屋ほり物師　長兵衛　半兵衛　仲蔵

尾州犬山葺師　磯右衛門　平八　栄助　源蔵　和平　伝右ヒ門

銭木弟両壱両三八平　六貫弐両　四百二　文朱

大此　ぎじ　キし　しん　ニ人　し　ニと　御座　候礼
此三月廿四日夜四つ半時
普請光じ寺し四ん寺さかん也
諸国ひい帳信ニ州所付
大工ひ致ニ州

③嘉永二年再建棟札

表

于時嘉永二年　己酉正月吉日

奉再建新羅大神　八幡大神　八王子神社

祠壱宇瑞垣共新建立郷中安全院内吉利

別当　大泉院恵激謹行

時荘官　加藤円治　年寄　加藤嘉兵衛

百姓代　加藤慶助

裏

当座神者普請天保十二辛丑年
勧化帳附始テ弘化乙巳二月鉞始ニ
同午之春ヨリ取掛テ嘉永元年
冬マテニ有増円成ス　此社円成之後槌ヲ打事無シ

于時慶応四辰年上葺直シ
同年四月朔日遷宮ス此時
餅拾棚献シ投

資料6. 天保11年愚渓寺再建請書

（送り仮名・漢字の用字等を一部改変・括弧書き補注付加）

東濃新報「今昔日記」41　1965年5月18日付掲載記事より

一札

今度場所替御再建に御座候に付き、拙者ども見積り方をもってお渡し下されありがたく仕り合い存じ奉り候。然る上は絵図面積もり書の通り当子年（天保 11 年　1840）より辰年（弘化元年　1844）まで五ヶ年のうちに残らず総出来仕るべく候。御普請中ご約定左の通り承知奉り候。

一、御普請場所において火の用心に用心仕り候事。

一、御材木元切を始め杉檜の皮はぎ仕り末口一振りに至るまで切り留め候様仕るべく候事。

一、御材木丁寧に扱い、材端・削り屑に至る迄一切境外まで取り散らし申すまじく候事。

一、御普請年限中御殿堂及び御塔頭等それぞれ積金高にて出来致す内に前金拝借一切御願出申すまじく候事。

一、棟梁以下差し添え候大工共御目鑑に相叶い候者差し入れ、御断りなくみだりに召し連れ申すまじく候事。

一、御普請年限中仲間喧嘩を始め、酒宴・遊興・勝負事、決して仕るまじき事。

一、御普請成就まで棟梁を始め仲間合の者、一日たるとも他向にまかり出で申すまじき候事。

右約定の通りきっと相守り、見積書差し上げ候金高にて地形より建前瓦葺、壁上塗、諸雑作、高塀まで相違なく出来仕るべく候。万一御約定に相背の儀仕り候はば、奥印御請人に相立て候者どもまかり出で、見積書の金高をもって絵図面の通り相違なくでき申すべく候。後日の為一札、よって件の如し。

天保十一年子正月

尾張国知多郡矢梨村　棟梁大工　亀三郎　印

美濃国可児郡中村　　棟梁大工　利助　印

尾張国知多郡矢梨村　棟梁脇大工　仙吉　印

愚渓寺

御役寮様

村々御役人衆

村々御世話人衆

本書面の通り後日においていささかも違乱の筋御座無く候。よって押印仕り候。

（矢梨村棟梁大工）亀三郎兄伊助　印

矢梨村庄屋辰蔵　印

大工取締役林右衛門　印

（可児郡中村大工）棟梁利助親類宇兵衛

中村庄屋　源蔵　印

1. 新羅神社拝殿

2. 新羅神社本殿

3. 愚渓寺庫裡・方丈（建替前）

4. 愚渓寺本堂（建替前）

5. 妻木八幡神社百詣石（上）
6. 同上寄進者銘部分（下）
「尾州知多郡阿久比谷卯之山村
竹内友右エ門

7 － 1. 崇禅寺鐘楼門正面（土岐市妻木町）

7 － 2. 崇禅寺鐘楼門側面

宝暦 5 年（1755）　知多郡切山村大工　久保忠八郎建立

8. 八剣神社拝殿（土岐市妻木町）

嘉永 7 年（1854）
知多郡片名村大工　磯部甚吉郎重房建立

9. 安昌寺山門（長久手町）

文久 3 年（1863）
山口村大工　大津磯右衛門重嗣・
切山村大工　斎藤桂助永寛建立